

# 先週の回答



新太郎は慎んで両手をついて、頭を下げた。座敷の床の間を背にして中央に父虎三、右隣りに妻鶴子、左隣りに頬を染めて娘の小百合が俯いて座っている。

「わたくしにください」

新太郎がさらに頭を深く下げた。

「何で？」と、虎三。

「愛しているからです」

「どの辺を？」

「全体です」

「ある部分だけでなく、全体をか？」

「はい、全体をです」

「が、そー簡単にはやれんよ。なあーかーさん」と、隣りに横目を送る。

「なぜですか、新太郎は顔を上げた。

「手塩にかけて育てたからだ」

「手塩にかけるって？何ですか」

「だから、こー手のひらに包んで」両手で何かを包むかっこうをする虎三。

「キズがつかないよーに大切に大切に育てたんだよ」と手のひらに何かをこねくりまわすかっこうをしながら、

「掌中の珠を簡単に手放すわけにはいかんと言っとるんだ。なあ、かーさん」隣りの妻鶴子はしとやかにうつむいている。

「だれをですか？」と新太郎。

「娘に決まっとるだろう」小百合の肩を引き寄せて自慢げに、

「この子は純血（さら）のままなんだ。手塩にかけたから」

「だったら、これからも大事にしまっておいてください」



「ん」と虎三。

「だははは、きみはバカか」と破顔した。「しまついたら、きみにあげられないじゃないか。なあ」と娘の顔を見る。

小百合さんも口許に手をやって「ほほ」と笑う。鶴子夫人は微動だにせず、慎ましくうつむいている。

「いただきたいのは、奥さまのほうです」

一瞬空気が止まる。

父と娘の口から同時に「え」が出る。

「お受けいたします」と頬をやや赤くして鶴子夫人が囁いた。

「きつと幸せにします」と、力強く新太郎が夫人の手を握る。

掌中の珠とその父親の開いた口はふさがらないまま固まっている。

# 今週の問題



□の中に漢字を埋めて  
四字熟語を完成させてください。